

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書①

報告者： 藤巻 貴子 （大阪市立大学 大学計理課）

2018 年度 大学コンソーシアム大阪 マレーシア職員研修報告

1. 研修期間： 平成 30 年 8 月 5 日(日)～11 日(土)
2. 研修内要：
 - 8 月 5 日（日） 大阪よりマレーシア・クアラルンプールへ移動。
到着後、参加者の顔合わせ
 - 8 月 6 日（月） 午前：Taylor' s 大学訪問
午後：マラヤ大学にて APSSA 会議プレカンファレンス参加
 - 8 月 7 日（火）～8 月 9 日（木）
マレーシア工科大学にて APPSA 会議参加
 - 8 月 10 日（金） 午前：マレーシア工科大学訪問
午前：Heriot-Watt 大学訪問
 - 8 月 11 日（土） 日本帰着
3. 研修報告：

職員として海外での国際会議に参加するという貴重な機会であった。国際会議では、アジア太平洋州の大学の教職員からの先進的な学生支援の取り組みについて貴重な情報を得ることができた。

また参加している教職員のスキルや問題意識の高さ、明確な目標設定を目のあたりにし、非常に刺激を受けた。

同時並行で開催されていた学生のワークショップでは、各国の学生が特定のテーマについて意見を出し合いながら最終日の成果発表を作成したが、その過程を Youtube で見たり、直接学生から話を聞いたりして、学生達も異文化交流を通して多くを学んでいるのだと実感した。

大学訪問では各大学の教職員が非常に暖かく迎えてくれ、優秀な学生を受け入れるためのアプローチ方法から学生の学修支援や就職支援などの取り組みについて意見交換し、またネットワークを構築できたことは非常に有益であった。

今回の研修で得られた知見や経験を今後の自身のキャリアに活かし、大学の貢献に結び付けていきたい。

報告者： 松木 里奈 （大阪市立大学 国際交流室）

大学コンソーシアム大阪 職員研修

16th APSSA 国際会議およびクアラルンプール近郊大学視察について

・ APSSA 会議について

主に午前のプログラムでの、会場校の UTM のディレクターや企業・団体からのゲストスピーカーによるお話やパネルディスカッションは、立ち位置の違いこそあれ、単にマレーシア国内だけでなく世界を相手にプロダクト（大学の場合は学生や研究成果、企業の場合は商品やサービス）の価値の最大化を図り、市場に切込み成長していくという決意と意気込みを肌で感じられるものでした。斬新な課題分析や具体的な戦略も語られ、プレゼンテーションも多彩で興味深く拝聴しました。

午後のセッションは発表者のレベルにかなりばらつきがあつて、色々な大学の事例を広く浅く知るといふ点では参考になりましたが、記念エントリー的なチームもあるようで議論の深まりはあまり見られず、そこが少し残念でした。

学生たちの発表は、数日の討議期間で大きな成長を見せていたのが印象的でした。いずれにしても、大規模会議の運営形態、マレーシアの英語教育の浸透ぶり、タイやフィリピンの元気さ、中国の強い意気込みといった、国ごとの特徴を感じたり、日本からの参加と自己紹介すると即座に「少子化」についての質問を受けたりしたことも含め、国際会議に出るような機会の少ない職員にとってはすべての行程が貴重な経験となりました。

・ 大学視察について

特に、会場校でもあった UTM の視察は非常に有意義でした。短期英語研修に専門分野の研修を織り交ぜたショートプログラムのカスタマイズ対応や、「さくらサイエンス」などの資金を利用した交流などについて、実際に対応にあたっている方のお話を伺い、連絡先の交換ができました。また、TAYLOR'S 大学、HERIOT WATT 大学についても、学生と社会のニーズをしっかりと捉え対応しながらステークホルダーに向けて巧みなブランディングを行っている様子、出口戦略（とそのプレゼンテーション）に相当な注力がなされているところ等、伺い知ることができ、大いに刺激を受けました。

最後に、多くの準備とコーディネートをしていただいた塩川先生と、西本様はじめ事務局の皆様には心から御礼を申し上げます。

また、今回ご一緒させていただいた職員の皆様には本当にお世話になり、期間中のちょっとしたおしゃべり、公式 and 非公式な情報交換がある意味、一番の収穫でした。この経験を活かし、すべき仕事に Engage し、教育と研究にかかわる人々を Empower できるよう、そしてポジティブな変化を Evolve することをめざして参ります。



平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書③

報告者： 矢野 まひろ （大阪市立大学 研究支援課）

「現地大学訪問」

○TAYLOR' s 大学見学

学生 15,000 人（内留学生約 250 人）、職員 1,600 人。世界大学ランキング 29 位。世界 120 以上の機関と交流がある。学生支援課の窓口には、対応完了後に学生が 5 段階評価をつけるシステムを導入し、窓口横のタッチパネルで操作できるようになっていた。また、受付は番号札システムとなっていた。

○プレカンファレンス（@国立マラヤ大学）

本会議に先立ち、3つのグループに分かれてグループワークを実施。大学資源（設備、収入など）の獲得方法について、各国の状況を報告し合い、今後の戦略立てに関して情報共有を行った。入学者数が減っている大学については、奨学金システムの活用や、国からの補助金で賄うという案が数件見られた。

○マレーシア工科大学（UTM）見学

学生 23,023 人のうち 3,086 人が留学生。世界大学ランキング 228 位。300 以上の機関とグローバルパートナーシップになっている。日本スタイルの教育（先輩-後輩システム、ものづくりなど）も取り入れている。

○Heriot-Watt University 見学

世界に 5 つのキャンパスがある。マレーシア国内ではイギリスのカリキュラムを導入しており、就職にも有利。図書館と自習室は 365 日 24 時間開館、給湯室も備わっており、学習環境が完備されていた。学生支援課は開放的なスペースとなっていた。

「APSSA 2018 国際会議（@マレーシア工科大学）」

初めの 2 日間は職員の発表を、最後の 1 日は学生によるグループ発表を聴講した。各大学の特徴的な取り組みを聞き、自大学との比較、課題を考える機会ができた。また、国境を越えて協力し合う学生の姿を見て、コミュニケーション力の重要性を実感した。

（まとめ）

APSSA 国際会議における学生同士の発表を聞き、国境を越えて協力し合い、一つの物を作り上げる姿に刺激を受けた。このような学生たちのために、支援体制が大学全体で構築できれば、更なるグローバル化への第 1 歩になると考えられる。また、アジア中の各国の大学関係者が自大学の取り組みを報告し合うことで、相互に特徴を理解でき、それらを持ち帰ることで、今後の大学の発展に繋げることができると肌で感じた。

今回、複数の大学を見学する機会も得られ、かなりの刺激を受けた。これらの見学した大学とは規模が異なるため、自大学におけるすぐの模倣は厳しいところもあるが、充実した実験施設、講義室のバリアフリー設備、学生に開かれた事務室など、良いところを本学でも参考にできれば、より学生に近く発展した大学になるだろう。

大学職員として、大学の価値を高めるための意識啓発のよい機会となった。

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書④

報告者： 浅田 直哉 （学校法人大阪経済大学 財務部）

海外 SD 研修を通して

APSSA 国際会議 2018 および現地大学の訪問を通して感じたのは「危機感」である。大学のグローバル化が叫ばれる中、マレーシアを含む海外の大学では、当たり前のこととしてグローバル化を受け入れ、世界を舞台に大学運営をしている様子が伺えた。これは大規模大学だけの話ではなく、本学のような中小規模大学にも言えることだ。APSSA 国際会議 2018 の参加者の多くは、非英語圏の出身で、国際関係以外の部署の職員だ。言語という壁を乗り越え、他国の大学と問題や課題を共有し、学ぼうという姿勢が日本の大学の「遅れ」を感じさせた。

今後、少子化の影響により、国内の 18 歳人口は減少していくが、幼少期からの英語教育や SNS の普及で、学生のグローバル化はさらに進んでいく。その中で、国内の学生が必ずしも日本の大学へ進学するとは限らない。こうした環境において、大学のグローバル化は、今後の生き残りをかけた最低限の取り組みだと感じる。本研修を通して、そのグローバル化が語学だけでないことも改めて理解することができた。そのひとつに、海外大学の取り組みやアイデアを学び、世界の大学の今を知ることを挙げる。訪問先の Taylor's University や Heriot Watt University では、校内に小さな映画館やボードゲームができる部屋を設置していた。学生がいかにストレスを発散させながら、勉強に集中できるかがその意図だ。日本にはない海外大学の取り組みについて学び、世界の大学に対抗できるアイデアを考えることも、大学のグローバル化のひとつだと感じる。国際関係の部署だけがグローバル化を考えるだけでは、世界の大学には追いつけない。

大学のグローバル化は、教職員一人ひとりがその意識を持ち、取り組んでいかなければ成し遂げられない。また、世界のグローバル化の波から遅れをとる日本の大学にとっては、早急の課題であることも認識することができた。今回の海外 SD 研修を通して感じたこの「危機感」を共有して、自大学での業務に活かしていきたい。

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書⑤

報告者： 香山 由希 （大阪女学院大学 教務・学生課）

海外 SD 研修(マレーシア)に参加して

今回の研修は私にとって初めての海外研修であり、また初めて学外でプレゼンテーションをする機会でもあった。そのため、入職以来最大ともいえる挑戦の場でもあった。

一つ目の挑戦は「英語でのコミュニケーション」である。プレゼンテーションの準備は十分にしていたが、肝心の英語練習をしていなかった私は、初日のプレ・カンファレンスで現地訛りの英語を聞き取ることが出来ず、グループディスカッションでも相手の意見を聞き、自分の意見を伝えることの難しさを痛感した。3日目には段々と英語の聞き取りに慣れ、講演や各プレゼンテーションの内容を理解することができたが、他国の参加者の英語力を目の当たりにし、学生だけでなく事務職員も国際的に通用する語学力を養う必要性を感じた。

二つ目の挑戦は「英語によるプレゼンテーション」である。今年4月に APSSA でプレゼンテーションをすることが決まってから、大学の歴史を改めて学び、発表テーマについて詳しい事務局担当者から内容のレクチャーを受けた。アイコンタクトやジェスチャーなど聴衆の目をひくテクニックはネイティブの教員から特訓を受けた。APSSA では2日間にわたって約 80 組のプレゼンターが各会場で発表を行うのだが、他の発表をみて感じたのは圧倒的なプレゼンテーションの「うまさ」だった。日本の学校で習った発表形式で育った私は時折講演台の原稿を見ながらジェスチャーを交えて発表を行うという想定しかしていなかったのだが、皆スティーブ・ジョブズのようにプロジェクターの前を自由に歩き、オーバーアクションで見ると引き付けるプレゼンテーションを展開していた。なので私は多少引け目を感じながらも練習したとおりの進行でプレゼンテーションを行ったが、普段の仕事で初対面の聴衆に対して発表を(ましてや英語で)行う機会など滅多にあるものではないので自分のキャリアにとっても大きな経験を積むことができた。

最後に、研修前の自分と研修後の自分を比べると、自分たちの働いている業界をグローバルな規模から捉えるものの見方、考え方の「きっかけ」を得ることができたのが今回の最大の成果だと感じている。マレーシアの大学を数校訪問した際にも自大学とはまったく別物の魅力を感じた一方、自大学に取り入れるべき取組み・アイデアもあった。また、研修中に知り合ったフィリピンの大学職員との出会いも私にとってとてもよい刺激となった。今後もこのような国際的な場に積極的に関わっていきたいと思う。

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書⑥

報告者： 朝倉 由衣 （摂南大学 就職部就職課）

大学コンソーシアム大阪主催 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書

1. 研修期間

2018年8月5日（日）～8月11日（土・祝） 5泊7日

2. 研修場所 マレーシア（クアラルンプール）

3. 研修に参加して

大学訪問や The Asia Pacific Student Services Association (APSSA) 国際会議 2018 の参加を通じ、日本との相違やアジアの諸大学教職員・学生達の強いエネルギーに触れ、圧倒されるばかりの研修であった。

マレーシアの3大学 (University of Technology Malaysia、Taylor's University、Heriot-Watt University) の訪問では歓待を受け、外部評価を意識した魅力的な大学づくりや海外の教育機関・企業・団体との連携について学ぶことができた。国家的な留学生の受入促進と国際的高度人材育成といった背景や、アジア諸国・世界を視野に自大学のプレゼンスを高める大学運営の取り組みを肌で感じることができた。

APSSA 国際会議 2018 では、テーマに基づいた各大学の事例紹介や学生の発表を聴講。学生課や就職課等国際関連部門以外の職員も多く参加し、博士号を持つ方も少なくなく職員の専門性が高いことが印象的であった。学生発表では、アジア諸国の各大学のいわゆる“エース級”が参加していることもあろうが、多様な学生が英語を巧みに操り各チームの討議内容を発表する姿に舌を巻くばかりであった。

日本では大学淘汰の時代を迎え、国内でいかに生き残っていくか危機感が高まっている。国内での地位確立は重要であるが、アジアの大学が国を越えて連携し、世界を視野に教育改革を進めていることに対しどれほどの危機感を持つことができているだろうか。グローバル化や人工知能 (AI) の進化がますます進む社会で活躍する人材育成に取り組む海外の大学と日本が比較された時に、早晩な学生に選ばれなくなってしまうのではないかという焦燥感を抱いた。大学のグローバル化という関連部署が担当であるという錯覚を持ってしまいがちであるが、大学教職員各々が自覚を持ち、業務に取り組む必要性があることを強く感じた。

また、研修を通じ「言語」は目的ではなく手法であることを改めて認識することができた。グローバル化という英語力の底上げに焦点が置かれてしまいがちである。しかし、多様な国籍や文化的背景を持つ人々（学生・教職員）が共通のミッションに向かう様子を目の当たりにし、語学力のみならず相互理解や価値創造力、社会貢献意識といったグローバル人材の本質を体感的に理解することができたように思う。

質の高い魅力的な大学運営のために必要な職員力（語学力・ホスピタリティ・コーディネーション能力等）の向上が自身の課題であると痛感するとともに、本研修で得たこと・感じたことを周囲にも還元していきたいと感じた研修であった。

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書⑦

報告者： 金川 利江子 （青森中央学院大学 国際交流課）

海外 SD 研修（マレーシア）に参加して

本研修では、他大学職員や海外大学教職員との情報交換、今後につながる人的ネットワークを築けたこと、学生獲得のための海外大学の戦略的なアプローチや明確なビジョンに触れたこと、APSSA 国際会議を通して、海外大学が共通の問題に対して自大学とは異なる解決方法を示した事例を学ぶことができ、大変貴重な機会となった。

APSSA 国際会議で紹介された事例発表のもととなる課題や問題は、自大学で抱えているものと共通している部分も多く、それに対するアプローチ方法も決して目新しいものではなかったが、情報化社会がさらに加速する中で、どのように学生を支援するプログラムを作るべきか、学生の心身の健康を守るための環境や支援体制をどう整えるべきか、留学にどのような意味を持たせ、学生にインパクトを与えるか、多様性を持たせるか、地球市民として羽ばたかせるにどのような支援や機会提供を大学が行うべきか、目先の就職率ではなく人生の目標や生涯学習の動機となる教育を提供するプログラムの開発などを、参加した各大学が真剣に取り組んでいることがよくわかった。それが明確な大学のビジョンによって、体系的・戦略的に教職協働で行われていることに非常に感銘を受けた。

また、訪問したマレーシアの国立・私立大学のどちらも、学部から英語を教授言語としているため、海外との共同研究や学生の移動（Mobility）を容易にし、より多様な学び方を学生に提供していると感じた。自分はどのような人材となるために大学へ行くのか、経済的負担を抑えてより多くの学びを得るためには、どの大学を選ぶのか、自分を学生に置き換えて考えた時、マレーシアの各大学は進学先としてとても魅力的に感じた。

一方で、果たして自大学ではターゲットとしているアジア諸国の教育事情を理解し、そのうえで外国人留学生を自大学へ惹きよせる魅力を打ち出せているであろうか、と強い危機感を持った。グローバル化が加速する中、このまま漠然と具体的な対策を取らずにいると、外国人留学生はおろか日本人学生の獲得も困難になるかもしれない。

教職員が多様性を受け入れ、時代に合った学生との関わり方を学ぶこと、他大学との人的交流を積極的に行い、情報を共有すること、そして新たな留学生支援や日本人学生の人材育成プログラム構築の視点を持つためにも、各部署の職員が関連するテーマの国内のみならず国際会議等へ積極的に参加して世界的な高等教育の実情に触れるべきであり、そのための英語力の向上が急務であると強く感じた。今回の研修で得たことを自大学で共有し、今後の業務に反映していきたい。

最後に、今回大学コンソーシアム大阪会員ではないにも関わらず、このように気付く機会をご提供くださいました塩川先生はじめ事務局のみなさま、ご参加の職員のみなさまに心より感謝いたします。

平成 30 年度 海外 SD 研修（マレーシア）参加報告書⑧

報告者： 菊池 ゆとり （国際基督教大学 学生サービス部 学生グループ）

海外研修報告書

1. 研修内容

Universiti Teknologi Malaysia（マレーシア工科大学）にて開催された APSSA 16th Conference への参加、クアラルンプール近郊の大学(Universiti Teknologi Malaysia、Taylor's University、Heriot-Watt University マレーシア校)の学校見学

2. 研修で得られたこと

この研修を通して、マレーシアをはじめとする新興国の高等教育事情について深く知り、国際化に遅れをとっている日本との大学教育の格差を強く感じる結果になりました。

APSSA カンファレンスにはアジア各国の大学からの職員が参加していたので、これらの大学の概況を把握できました。特に、プレカンファレンスのグループディスカッションでは、各国の代表がテーマごとに集まり、各国の状況報告を元に議論しました。私は「学費の獲得・施設の維持」というテーマのグループに入り、日本の少子化について報告しました。各国より助言をいただきましたが、何よりも日本は他のアジア諸国と比較して、政府からの補助金の割合がかなり少ないと感じました。

また、現地の国公私立各校の見学によって、さらに詳しいマレーシアの高等教育の状況が理解できました。

Taylor's University は、マレーシアの私立大学でもトップクラスに位置する大学です。観光学部や、シェフ・ホテルマンを育成する学科が発達しており、その他の学部や施設もとても充実していました。

Universiti Teknologi Malaysia は、マレーシアの工学系大学最古の国立大学でした。ロボティクス研究室を見学しましたが、最先端の設備や潤沢な予算があるように思えました。

Heriot-Watt University マレーシア校は、イギリスに本校のある Heriot-Watt University の分校です。同校はイギリス本校とドバイ、マレーシアにある分校を持ち、その特性を生かして学生のモビリティを上げ、より国際的な学びを提供していることが新しく思えました。

日本国内では中小の大学が学生の獲得に苦しむ状況であり、我が校もそのうちのひとつであることはいうまでもありません。比べて、マレーシアの大学は英語が得意ではない留学生のトランジットポイント(マレーシアで英語を習得し、欧米の大学・大学院に再留学する場)として大きく成長を遂げ、大学の設備や規模、教育や研究の成果を挙げています。学生人口の違いによる予算の問題など、簡単に解決できないことも多いですが、講義の英語化を推進したり、留学生に対する学生サービスを充実させたりすることによって、多少の改善はできるのではないのでしょうか。